

P. F. ドラッカーにおける文明と技術 ——メディア論的接近

P. F. Drucker's View on Civilization and Technology:
A Media Approach

井坂康志

Yasushi Isaka

(東洋経済新報社)

Summary

A leading management thinker of 20th century, Drucker had already claimed that some disruptive technological changes would result in universal and human attitude change. He viewed technology as work and tools in a systems context, and concluded that technology was no longer separate and outside of culture, but integral part of human society. His specific point of view on technology had since been understood as “the extensions of man,” which was a key concept by Marshal McLuhan's way of understanding media technology. He knew that social and human factors could determine technology as well vice versa and generate conscious or unconscious adoption of values, behavior, procedures, norms and institutions within human society by way of “universe of discourse.”

序

第2次世界大戦以後、ドラッカーは社会構造と文明の観察にもとづき、技術や知識に関する発言を折に触れて行うことによって自らの思考様式を明らかにしてきた。そのことについて戦前における政治学者、戦後におけるマネジメント研究者の余技というにはあまりに深遠な暗示をはらむものがあった。むしろ、そこには彼のマネジメントの代表的な著作群にも濃厚に息づく独自の方法論の原型と本質を見ることが可能である。ドラッカーの創意になるマネジメント体系それ自体もいかに巨大とはいえ彼の広大無辺の思想的営為の一角を占めるものに過ぎない。戦後、産業社会成立の条件を模索し続けたドラッカーにとって、技術や知識の領域における論述は彼のマネジメント思想及びその思考スタイルの命脈を象徴的に表現するものと考えてよい。さらには、さほど華々しくないものの、そこにはもう一つの野心的試み、すなわち脱近代への通奏低音を聞き取ることさえ可能である。

というのも、技術論がマネジメント学者の越権と見なされようとも、それがドラッカー自身の体系的発言の筋道から避けて通ることのできないものであったことは間違いない。ただし、彼の発言が一連の知識や技術の論議において、一貫して傍流以下の位置しか占めえなかったのは、彼の考える技術が後述するようなきわめて限定的かつ特異な視点でしか語られなかった事実と深く関わっている。それはあえて言えば、技術を語らずして技術を語るという一風変わった方法によっていた。特にそれが反ナチズムという抜き差しならぬ危機の政治的発言を経て、すぐれて近代合理主義への批判的意図を濃厚に滲ませていたことも、それに一役買っている。

そのことを傍証するのにさほどの努力は必要とされない。ドラッカーの思考スタイルとは、彼が自ら培い自らに合う、いわば熟練の職人の手になじんだ道具にも似たものとして深化・発展させつつ、常に新たな知的領域に挑戦していくプロセスであった。それは言い換えれば、彼の知的陶冶の過程であるとともに、一流の観察者として「腕を磨いてきた」軌跡でもあった⁽¹⁾。その知的格闘の過程に見られる一つ一つの課題を振り返るとき、われわれは個別具体的なものごとの理解方法が彼の世界観・文明観と深奥部において共鳴する事実に気づかないわけにはいかない。そこで注目すべきはまさに彼の手になじんだ道具、すなわち思考方法がどのようなものであったかにある。手にした道具とその使用法ほどにその人の世界観を雄弁に物語るものはない。

同時に、産業や組織、ひいては社会構造から文明全般に至る多様な関心領域の一つ一つは細部から巨部まで一貫したスタンスによって差し貫かれていた。しかも、彼の視角や思考スタイルは最晩年にいたるまで初期のそれとほぼ変わらなかったことはわけても注目し得る。彼は2005年5月に現在進展する技術的变化を語るに際し、次のように述べているのがその現れである⁽²⁾。

「知識が社会の中心に座り社会の基盤になったことが、知識そのものの性格、意味、構造を変えた。この断絶こそが最も急激であって最も重要である。実をいうと、知識労働の生産性は15世紀のゲーテンベルクによる印刷革命以来、たいして伸びていない。[略]いよいよ再び技術が教育を通じて文明を変える。[略]情報技術によって教え方が変わり、驚くべきことに、教えることの中身まで変わっていくはずである」

むしろドラッカーは現代の多様な技術状況から生み出された知識や認識について、ようやくそれらを歴史的かつ体系的に扱いうる段階に入ったと見なしていたことが上記から読み取れる。それは知識と社会との相互交流における絶えざる応答、フィードバックの結果明らかとなった知識社会の一つの中間決算にも相当する見解と見られよう。では、まず彼が技術というものをどのように見ていたのか、その点から考えることにしたい。そのことが、今後のドラッカー

研究への展開方法について一つの示唆を与えてくれるものと考えためである。

本稿は結論としてはドラッカーの技術観の概要を示すとともに、それを基礎としたうえでなされた解釈方法の一端を示すことにある。そのために技術に伴うドラッカー的視座に光を当て、背後に生ずる陰影から彼の思想的営為の輪郭をいささかなりとも浮かび上がらせることができれば、所期の目的は一応達成されたことになる。

1. 技術観の範囲

(1) 人と技術

はじめに、本稿で依拠するドラッカーの技術観について若干の整理を行っておきたい。まず最初に明らかにしておかなければならないのは、彼は技術者でも工学者でもなかった事実である。彼は客体としての技術を扱う者でもその専門家でもなかった。彼はほぼ独学で技術に関する膨大な知識を身に付けたと考えられるのだが、その知識を政治、経済、社会、教育等の広大な領域における鍵概念として用いている。自らの関心範囲の基本的な性格について彼は次のような説明を行っている⁽³⁾。

「技術とは自然のものではなく人のものである (Technology is not nature, but man)。道具についてのものではなく、人がいかに働くかについてのものである。人がいかに生き、いかに考えるかにかかわるものである。[略]まさに技術は人間の延長であるがゆえに、その基本的な変化はわれわれの世界観の変化を現すとともに価値観を変化させる」

彼は技術を「人」としている。すなわち、それは客観的かつ普遍的な存在ではない。一元的ではなく、多元的・複層的構造をはらむものである。むしろその性質は解釈する側の知覚次元に属する知識の一形態であって、しかも「人がいかに働くか」についてのもの、簡単に言えば仕事に関わる概念であったことがわかる。そのような考え方は、彼が他に先駆けて主張した知識の概念においても同様である。

技術概念を知識の一領域とするならば、ドラッカーの知識概念は、経験や解釈を不可避とする行為論を包摂する点において、理性主義的知識概念と様相を異にする。ドラッカーにおいては全体と諸部分の総和を異なる次元のものとして捉えるのみならず、さらに機能の過程において認識作用の能動的性格にまで踏み込む側面をも併せ持つものだった。そしてここにこそドラッカーの技術のみならず、あらゆる課題に対して示された解釈構造の原型を読む鍵が存在する。

その点に留意するとき、まずもってドラッカー自身が技術の問題を扱うにあ

たって強く目を向けることを求めたのが、M.マクルーハンであった⁽⁴⁾。マクルーハンの言説は、ドラッカーの技術理解にあたって、撚り糸の役割を果たしている。彼がマクルーハンの技術論を評価しほぼ同様のことを次のように述べたのはその証左であろう⁽⁵⁾。

「マクルーハンにとって技術とは、人間完成の道具だった。技術によって人間は、自らを変化させ、成長させる。他の動物が進化の力によって新たな器官を発達させるように、人間は新たな道具によって自らを成長させ新たな存在となる。[略]『技術は人の一部である』」

ここから窺われることとして、ドラッカーの想定する技術とは、主体による事物への内在化、すなわち知覚的認識を介する能動的意味付与と道具との一体化、そして人格的陶冶を促す知識であった。そこにおいては、技術は認識主体の能動的な働きの上に成立するものとされ、ジョージ・オーウェル「1984年」流の陰鬱な技術観とは質的にまったく異なる。さらには技術は主体に受肉化され一体化されるものであって、その意味ではコートのように着脱可能というよりは、皮膚や器官のように身体の一部をなすものと考えられた。それは主体にとって行為論的次元から一歩進んで存在論的次元、そして責任論的次元にまで融合しうる技術観であった。

(2) 知覚と脱近代への企み

ここで指摘できる特徴が少なくとも2点ある。

第一にドラッカーにおける技術観には知覚の重視がある。それは客観的たことに偏重した近代西洋の思想潮流をふまえつつ、その理性主義的病理を剔抉する新たな論理の提示と考えられる。

そもそも彼の知識概念には2種類が想定される。目的に関する知識(命題知)と方法に関する知識(方法知)である⁽⁶⁾。前者を西洋哲学の追究し、ひいては近代合理主義の要諦を構成した知識観とし、後者をその過程で知識の名に値せぬものとして抑圧・排除されてきた行動のための知識とする。主として『断絶の時代』で強調された「知識社会」(knowledge society)は、後者を主としつつ、新たな次元での体系化を志向するものだった。

というのも、いかに多くの命題知を持とうとも、技能としての方法知、すなわち知覚による行動のための知識を持たないならば依然対象に通曉しえず、具体的成果につながる知識と呼ぶことはできない。彼が示唆するように、いかに多数の数学や物理学の原理・法則を知っていたとしても、それだけで自動的にロケットや人工衛星を製造しうるわけではない。すなわち、いかに普遍的知識に通曉しようとも、それだけで現実問題について適切な推論をなしうるわけではない。

さらに、ドラッカーにあってはいかに多くの正しい命題知を持とうとも、それらを適切に実践行為に適用できるだけの知識を持たないのであれば行為としての正しさを手にすることもできない。ここで問題とされるのは、命題ではなく方法にある。彼の発した問いに即して考えるならば、「自由な知識社会とは何か」よりも、「知識社会はいかにして自由たりうるか」にあった。

では、推論を適切な行為に結びつけるための方法知とはいかにして獲得されるのか。思索と実践の反復(フィードバック)を通してなされるとするのが彼の立場だった。技術についても同様である。技術を「人に关するもの」とするならば、そこには人間社会との適切なフィードバックが不可欠なものとなる。そのフィードバックを可能とする方法知への変換装置の一つとして彼が技術を捉えていたことは明らかであろう。ここではさらにその先に見据えられた思想的配慮に目を向けることとしたい。そのためには今少し技術把握における知覚構造の背後にめぐらされた意図について考えを深める必要がある。

そこには命題知偏重への批判的視座がすでに潜んでおり、かかる価値判断が彼にあったことは明らかである。というのも、知覚重視の思考法そのものが近代合理主義への批判的視座を形成する推進力となりうる。そもそも彼の主として依拠する保守主義的アプローチに立つならば、いかなる技術も知識もその合理性や客観性のみを判断基準とはしない⁽⁷⁾。つまり、それがいかなる認識をもって始まり、いかなる構成によるものかは、社会の自律性、人間の尊厳、そして政治的正統性にとって問題とはなりえない。系統的に整序されているか否かにかかわりなくすべての技術が平等に独自の合理性を主張でき、普遍性に対して開かれているのであれば、自由な知識社会の名に値しないものとなる。

そのように捉えていくとき、もっぱら社会や人間意識に引き寄せて理解していく知覚重視の手法そのものが、技術中心的な視角を通して近代を把握する合理主義の硬直性を暗に批判するものと考えられるわけである。

そのような見解は彼の初期の著作にも見ることができる。すでに1939年にして、ドラッカーはナチズム批判の展開において「ファシズムにおいては、汽車が時間通りに走り、乞食が大通りから追い払われる。南大西洋で最高速の船を運航し、世界一道幅の広い道路をつくる。組織と技術の細部それ自体が目的と化す。技術的、経済的、軍事的な有用性さえ二の次となる」と述べている⁽⁸⁾。そうした理解に立つ認識とは、決して戦後にいたって見られたものではなく、初期における一連のイデオロギー批判にすでに織り込み済みのものだった。かかる技術観が近代合理主義への批判的視座の枢要な部分を形成する点は注目してよい。

(3)人間の延長

そして、もう一つの論点は、技術を「人間の延長」と捉えた点にある。ここでいう人間の延長とは何を意味するのであろうか。その点を探求するためには、

方法知における知覚的認識の態様をやや別の視角、すなわち道具の観点から明確にする必要がある。

知覚とは意味解釈に関わるプロセスである。ドラッカーの比喩によれば、われわれは「C」「A」「T」の各アルファベットをそれぞれ部分として補助的に使用するときにはじめて全体としての意味(CAT)を獲得することができる。すなわち、全体(「CAT」)と諸部分(「C」「A」「T」)との関係を解釈し、一定の意味を付与する行為が知覚の作用ということになる⁽⁹⁾。

同様の構図を人が「いかに働くか」についての道具としての技術、すなわち仕事に置き換えてみるとどうなるか。比較的新しい道具としてのコンピュータを考えてみると、コンピュータ・プログラマーがプログラミングを行う際に、道具としてのコンピュータを焦点的に意識してはいない。もしそうしたとすれば、彼は対象としての仕事を適切に捉えることができなくなるはずである。

同じことは外科医による手術についてもいえる。いかに最新鋭の機器を使用しようとも、外科医は腫瘍の摘出や患部の縫合において道具を補助的に意識するのであって、それらを焦点として意識し制御しようとするならば、動きはとたんに不器用なものとなり、目的達成は不可能となるはずである。この場合、外科医が焦点的に意識するのは、患部治療という目的であり、道具の働きは目的に対して知覚的に統合されなければならない。これが「部分は全体との関係において存在しうるに過ぎない」⁽¹⁰⁾の意味である。

すなわち、道具とはそれが補助的に意識されるときにのみ、全体の有機的体系において意味を持つ。換言するならば、道具としての技術は補助的に意識し使用される限り、主体の延長ないし一部となる。これがドラッカーの言う「技術は人間の延長」の真意であろう。すなわち、そこでは技術は人間の一部であり、それなくして現実を知覚することのできない「器官」となる。それがゆえに、その基本的な変化はわれわれの世界観の変化を現すとともに価値観を変化させる。いわば皮膚のごとく有機体の内部と外部のフィードバック器官として機能する。

さらにドラッカーにあっては技術とは知覚的次元のみならず、行為論的次元によっても捉えられてきた。彼は知覚の作用による構造を存在論、責任論に拡張することで新たな地平を切り開いている。技術と主体との関係性を事物と意味の関係性に一般化して考えてみると、知覚による意味把握とは、単に特定の技術が主体に外在するものとしてではなく、目的論的有機性を獲得する限りでそれを主体に内在化し、主体の一部をなすものとならなければならない。その場合、技術とは主体と一体化する点において、存在論に融合される。

そのとき技術は人間意識の一部に取り入れられることで、実践という形をとって人格的なコミットメントを~~もは~~かられる。その認識・実践に関わる一連の行為は主体による能動的関与、責任を伴う選択を不可欠のものとする。かかる知覚的統合によって獲得される技術は、それがいかなるものであれ、認識主

体と密接不可分の関係性を有することになる。すなわち、技術の使用には人格的責任が伴う。そのことは、行為論的知識が意味解釈と実践的適用を経ること、主体の存在の一部をなし、認識主体の人格、責任に融合することを意味する⁽¹¹⁾。

2. メディアとしての技術

(1) 技術のメディア論的次元

このようにドラッカーにあって技術とは存在論、責任論に至る人間の意識レベルに同化されうるものとして捉えられた。それは、技術がメディア論的次元において捉えられたことをも意味する。ここで言うメディアとは、M. マクルーハンの使用した語彙と基本的には同義である。マクルーハンの用語法に従うと、メディアとは単に情報伝達機関にとどまるものではない。自動車も住宅もメディアである。つまり、マクルーハンの考えでは、人間の身体器官の機能を拡大する人工的な装置はすべてメディアである。情報伝達機関としてのメディアは、特に視聴覚の感覚器官の拡張に相当する。すなわち、メディアとは「人間を拡大する技術」であること、そしてその引き起こす変化は、技術としてのメディアがもたらした新しい尺度に由来するものと考えられた。マクルーハンによる発言として『メディア論』に見られる典型的なものを2つほど例示してみたい⁽¹²⁾。

- ・「タイプライターは、活字がもたらした従来の動向をさらに堅固なものとし、綴りと文法を規制するのに直接的な影響があった」
- ・「電話が社会にもたらした最も意外な影響は、赤線地域を廃止しコルガールを生み出したことだ」

前者では、タイプライターという技術は、社会という一つの経路(チャネル)をたどって、結果として標準的な語法や文法を創造するのに力を発揮したと主張される。後者では、電話の出現によって、風俗街は物理的な区画に存立する必然性を急速に失い、結果としてそれらは消滅の方向に向けられるとともに、移動体としての新たな形態での出現を促したものと主張される。ともに、社会的・人間的知覚作用の帰結として生じた変化であり、技術そのものから必然的に導き出される現象ではない。そこでは客体としての技術よりもそれに対する人間社会の側の意味解釈、そしてそこから引き起こされる形態変化がその本質と捉えられている。

マクルーハンが述べたのは、メディアにとって意味を持つのはその実質的な内容ではなく、メディアそれ自体であるといったことだった。それをマクルーハンは「メディアはメッセージ」という切れ味の鋭い一文を持って表現した。

そのようなメディアの理解をドラッカーの思考法は忠実に反映している。というよりも、ドラッカー自身はマクルーハンに見られる「人間の拡張」の語彙を意識的に使用したものと見られる。一例として、『断絶の時代』には次のような表現がある⁽¹³⁾。

「今日のグローバル経済は、映画、ラジオ、テレビという新しいメディアによってつくり出された一つのパーセプションである。[略]世界は、マーシャル・マクルーハンというところの地球村となる。今日の大陸間の関係は、18、19世紀のスラムと高級住宅街よりも緊密である。[略]これらの電子メディアは、物を伝える。経済を伝える。グローバルなショッピングセンターを生み出す。これもまた新しい現象である。しかもそれは、新しいコミュニティを生み出す」

ここで彼は人間拡張の諸相として、すなわち知覚(パーセプション)の補助作用としてのメディアとしての技術に着目しているばかりか、その延長線上にあるマクルーハンの概念「地球村(global village)」の到来さえ確かなものとして受け入れている。ここからも彼が包括的実体としてのグローバルな世界というものに注目し、メディア論的次元によって技術を捉えていたことが理解される。

(2) 技術の発見——マクルーハンとドラッカー

先に道具はそれ自体が世界観を反映すると述べた。技術をメディア論的に捉える手法は、ドラッカーの世界観の鍵となるアプローチである。かかる彼の考え方を見事にコンセプトとして示し、言語化に成功したのがマクルーハンだった。マクルーハンが活躍した1960年代、そして70年代のはじめについて、ドラッカーは次のように記している⁽¹⁴⁾。

「あの10年は、外観だけが反技術だったに過ぎなかった。実際には、技術はあの10年に発見されたのだった」

この「技術の発見」なる奇態なフレーズに込められた思いが、ドラッカーのマクルーハンへの畏敬の念を如実に表現するものといえる。では、そのフレーズに対応するマクルーハンの思想内容とはどのようなものであったのだろうか。少なくともそこにはメディア論的次元を意識的に採用した理由がなくてはならない。

ドラッカーの技術観をメディア論的に読み解いていくとき、その彫琢にはマクルーハンとの類同点を追求するほうがより効果的とさえ言える。まず容易に指摘可能なのは、ドラッカーとマクルーハンの二人にあって、印刷技術に格別の地位が与えられる点である。むしろそれは単なる偶然ではない。そのこと

はある企みを静かに反映するものと見てよいであろう。その根拠はむしろマクルーハンの側からのドラッカーに向けられた発言によって明瞭に知ることができる⁽¹⁵⁾。

「ピーター・ドラッカーは……われわれの時代の『技術革命』について次のように述べている。『技術革命について、これまでどうも明らかでなかった点がひとつある。それはこの点が明らかにならないかぎり技術革命についての真の理解が得られないほど重要な点だ。つまり、それは技術革命を解き放つことになった変化、人間の姿勢や信念や価値観における基本的な変化が生ずるために、その前に一体何が起ったのか、ということである。いわゆる科学の発達それ自体は、わたしがこれまで示そうと試みてきたように、この根本的変革とはほとんど関係をもたなかった。しかしながら技術革新に先立つこと一世紀前に、一大科学革命をもたらしした世界観における一大変革のほうは、どのくらい[今日の技術革命に対して]責任を持つものであろうか』。本書は少なくともドラッカーのいう『これまでどうも明らかでなかった点』が何であるかを解き明かす試みである」

彼の言う「本書」とは、主著『ゲーテンベルクの銀河系』である。本書はドラッカーの言う近代を成立させた変化を探求し、それに回答を与えることを企図して書かれている。そこで探り当てられた動因がよく知られるように印刷技術の発明だった。

3. 技術の機能条件と脱近代への試み——印刷技術の解釈をめぐる

(1) 近代の創造者

それでは、メディア論的次元で印刷技術とはどのように捉えられるのだろうか。マクルーハンの発言の要旨はメディアを人間そのものの拡張ととらえた点にあった。彼の頭脳を捉えた主要な問題関心とは、メディアとしての技術であったことは間違いない。しかし、人間意識の外化をとまなう技術は歴史上多くあれど、印刷技術およびそれによって「発明」された印刷本だけが破格の扱いを受けるのはなぜか。その態様から簡単に確認したい。

まず、書き文字の誕生から印刷技術の発明を経て、近代社会は印刷された文字の影響を多分に受けて成立したものとする。文字文化の特徴は、第一に視覚優位にある。そこでは知覚の働きよりも、精緻な分析や緻密な論理構成のほうがより優れたものと見なされる。あるいは、具体的な事物よりも認識の客観性、抽象的な理念や体系のほうに価値があると見なされる。それらの観念は文字文化の爆発的普及の結果として立ち現れた文明史的な認識構造の変化と捉えられた。

その一つの帰結として、世界を分節化し、物質化し、空間に配置することによって、世界や自然を整序すべきとする考え方が人々の頭脳を支配する。すなわちドラッカーが「近代合理主義」として批判対象とするところのものが印刷技術を起点として成立していったとする見解である。『ゲーテンベルクの銀河系』が提起した野心的論点とはまさにそこにあった。同書の副題は「活字人間の形成」(*The Making of Typographic Man*)である。メディアを人間の意識が拡張されたものと考ええるならば、近代人とは活字人間たらざるをえない。そこから近代なる人間理性の銀河系が創生されていったとする。

同様の思考様式はドラッカーにおいても見られる。たとえば、ドラッカーは「活版印刷が知識とすべきものを規定した」事実を率直に受け入れ、自らの知識観の礎とするのみならず、その帰結として「印刷された本が教授法と表現法だけでなく教授内容まで変え、結果として近代大学を誕生させた」ことをも事実として認めている⁽¹⁶⁾。

「印刷革命が人類の歴史を変えた。人類の歴史において、知識が主役の座を得たのも活版印刷の発明以降のことだった。そのとき、ヨーロッパが抜kindでた存在となり、西洋と呼ばれるものになった。活版印刷の発明が書物の大量生産をもたらし、社会を一新し文明を生んだ。活版印刷による印刷本の出現は真の情報革命であった。[略]この印刷革命が人類の文化・文明を変えた。近代合理主義を生んだものは、蒸気機関ではなくこの印刷本だった」

明瞭に見て取れるように、彼は印刷技術によって大量生産されるにいたった印刷本の出現を、単なる産業上の部分的な技術規定から区別して、世界観そのものの成立の基盤から問題とする。印刷本を近代合理主義を創造したメディアと捉える。彼はさらに進んで、そこから「西洋」なる普遍的全体を把握する立場に立つ存在が生まれ、そこから存在拘束的な思想やイデオロギーが立ち現れるにいたったとの見解を示している。

いずれにせよ、彼は技術をメディア論的次元で理解したために、印刷技術を真の情報革命であり、人類の文化・文明を変えたものと洞察しえた。近代なる思考様式の全体が徹頭徹尾印刷技術の浸透に関係し、また技術と社会との相互の文化的基盤に関係するとの認識をも示している。技術とは彼にあってその時々、社会的存立形態と結びつき、存在と意識を変革させよう運命的な結合と見なされた。

(2) 認識作用の能動的性格

ドラッカーにあっての技術論とは単なる認識レベルのみではなく、同時に存在論にも接続することを先に述べた。仮に一般的な技術概念を「人が何をい

かにして知り、実践しうるか」に関する領域とするならば、それは人間の認識のみならず存在論をも内包せざるをえない。

合理主義の人間理解からすれば、技術は理性概念たらざるをえない。したがって、技術とは客観性と普遍性を意味するものとなり、同時に主観的で偏見をはらむ知識はその名に値しないものとなる。

しかしドラッカーの技術観は、主観や偏見を不可欠とする存在論レベルを包含する意味で、理性主義的技術概念とその様相を異なるものとする。むしろドラッカーの所説はその技術に関する思索の出発点において、認識作用の能動的性格にまで踏み込みつつ、そこから最深部で一挙に近代批判に接続するものだった。

すなわち、印刷がわれわれの意識をテキスト経由で形成するよう圧力をかけ、そこから一定の客観化を過度に重んずる思考様式を生み育み、ひいては新しい制度や文物、そして新しい人間像・社会像が形成されていった。とするならば、彼は近代を創造した印刷技術および印刷本について思いをめぐらせ、その意義を十分認めた上で、それを部分的に乗り越えなければならないという。そこに彼の近代批判の要諦がある。

そのような企みは彼のマネジメント著作の随処にも見え隠れする。初めのマネジメントの体系的書物『現代の経営』(1954年)において、「われわれの文明は、印刷された書式の魔力にとらわれている」との見方を示す。書物の成立に近代そのものの形成プロセスを見出し、近代人がその呪縛にとらわれているとの見解の一例である。

そもそも彼の技術観を吟味するにあたりマクルーハンが重要となるのは、マクルーハンがそうした脱近代的なアプローチによる技術理解、すなわちメディア論的視座の出発点を提示したためだった。それがドラッカーが暗黙のうちにとる思考方法を言語化し、技術、社会、文明を意味論的に紐付ける捩り糸の役割を果たした。

では、近代を乗り越える方法とはどのようなものであったのか。それは因果的なものというよりも、むしろ事象がいかに解釈・適用されたかに力点を置くものとならざるをえない。同時にそこでは、技術の問題が、人間社会の意味、解釈、行動、責任の問題に置き換えられて理解されなければならない。次のような記述がある。

「知識とは、本に書かれていることである。しかし、本にあるだけでは、たんなるデータではないにしろ、情報に過ぎない。情報は、何かを行うことのために使われてはじめて知識となる」⁽¹⁷⁾

「『教育ある人間』は、『人文主義者』の『教養課程』に見られるような書物偏重主義を克服しなければならない。さらに『教育ある人間』は、分析

的な能力だけでなく、経験的な知覚をもたなければならない」⁽¹⁸⁾

メディア論が人間の拡張を意味する限り、近代世界にあっては印刷物が人に世界を見させるものとなる。印刷物を通して知識の内容と範囲が規定され、高等な解釈機能を含む全神経が印刷物を通して働くことになる。そのような限定的な視野から眺められた世界は、均質な断片の組み合わせに過ぎなくなる。まさに、印刷とは「脳に直接差し込まれたレンズ」⁽¹⁹⁾であって、そのために他の機能に支えられなくなった意識は一種の麻痺状態にある。それは仮の生き方でしかない。本来形態に意味を求めてやまぬ知覚機能は眠ったままである。そこから部分的に脱することが、保守主義的アプローチの戦略目標における第一歩となるのは必然であった。そしてここにこそ、ドラッカーの解釈構造全般を解明する鍵が存する。

(3)文明の対話装置

上記の解釈方法とは、必ずしもマネジメントを本格的に論じるようになる戦後のことではない。むしろ戦前から彼の思考システムに内在するものでもあった。彼の依拠した保守主義の方法論とは、因果的説明によって社会的諸現象の問題を解くことを意図するものではなく、対話論的な相互理解という異なる原理を提示するものだった。ドラッカーは技術革新の教訓として「技術自体の変化よりも、それが教育や学校のあり方、内容、焦点に引き起こす変化のほうが重要」としている。知識に関する専門教育の失敗を例にとり彼は次のように述べる⁽²⁰⁾。

「専門知識を一つの『知識体系』へと統合することのできない『教養課程』や『一般教養』は、『教養』ではない。『教養』としての第一の責務、すなわち相互理解をもたらし、すなわち、文明が存在しうするための条件たる『対話の世界』(universe of discourse)をつくり出すことに失敗しているからである」

ここで彼は「対話の世界」の創造を文明継続の条件としている。対話とは受け手の側の能動的な理解や解釈によって成立する⁽²¹⁾。能動的な理解や解釈とは、対話におけるメッセージ内容が責任を伴いつつ選び取られたことを意味する。その場合、技術を因果の連鎖としてでなく、対話装置と見なすとき、その意味解釈、行動、責任の真の担い手とは発明者でも技術それ自体でもなく、同時代の社会全般、そして社会を構成する人々の学習能力と想像力、倫理観、教養の度合いに依存せざるをえない。すなわち、技術波及の結果自由な文明社会がもたらされるか否かは人間社会それ自体の能力次第となる。本稿冒頭での引用「技術が教育を通じて文明を変える」とはそのような対話的技術観に立脚するとき、

その真意を理解できるように思う。

技術が社会との対話とフィードバックを促す装置として、人間における意識活動の総体に働きかけるとき、ドラッカーが「文明」と呼ぶところのものの転換に大きく関わることとなる。その転換はひいては社会のルール、慣習、価値観、そして人間の意識にまで及ぶ。彼が技術を捉えるにあたって、「実用の知識」「技能」「テクノロジスト」という言い方でその実際性と人間的次元を問題としたのは、技術に働きかけつつ技術に働きかけられるその動態的・能動的コミットメントを強く意識していたからにはほかならない。その意味では、彼の技術論を取り上げるにあたって、社会的対話装置における方法が重視されてきたのは、いって当然のことであった。

ここで彼が展開した論旨を追っていくとき、われわれはすでに初期の著作から、かかる対話的世界の創造の観点から社会というテキストを読み込んでいく視点が、すでに共有されていたことに気づく。この見解は、歴史的・社会的対話の中で是認された価値観や信条を相対的に信頼に足るものとし、政治的正統性の淵源と考えた保守主義的な一定の視座とも符合する。

しかし、かかる対話的視座への接近がより顕著になってきたのは、やはり分析の対象を産業社会の中心機関たる企業に定めた1940年以降であったといっていよい。その表れとして、マネジメントを構成する主要なコンセプトの一つ一つ、マーケティングやイノベーション、意思決定、戦略論といったもののアプローチがしばしば異なる視点の対話的枠組みによって捉えられ、議論が深められてきた事実がある。しかも、それらは多くの場合、人間社会そのものの発展の舞台を提供するものでもあった。彼はそうした視点からあらゆる事象を社会的対話のコンテキストのうちに捉えていったのである。

では、そのような視座にもとづくアプローチはどの程度妥当性を主張しうるであろうか。

まずもって彼がそのような視座をとった最大の理由とは、技術そのものを合理的に捉えていく理解の仕方が、その社会的展開過程における多元性や複層性、偶発性を切り落としてしまう危険性があると見たためであろう。そこでは単に物事を因果の連鎖に還元することなく、その展開過程そのものをあたかも自らの生命力をもって繁茂する緑の自然を見るかのごとき視点で捉えていく思考が存在する。その意味では技術に対する視角ほどに自律的存在としての人間社会を尊重する彼の価値判断が明瞭に表現されるものはない。彼が好んだ言い回しを応用するならば、重要なのは「社会の『技術』化」ではなく、「技術の『社会』化」にあった。その際、彼のとる姿勢には他の領域の言説にも共通するいくつかの特質がある。その方法論的基盤に迫っていくとき、次のような諸点が確認される。

- (1)近代合理主義とドラッカー的な技術観との間には、実質的また方法論上で基本的な相違が存在し、少なくとも人間社会の考察の原理として近代

合理主義は不適當である。近代を乗り越える技術や組織を構想するためには、それ自体を一つの対話装置と見なす必要がある。その観点からメディア論的次元における理解が不可欠のものとなる。

- (2)歴史において立ち現れた技術の意味を探索するということは、それによって触発される意味、行動、変化を理解することでなければならない。それは技術を事実とその因果連関についての単純な客観的蓄積ではなく、社会的応答過程における内的連関の理解を重視したものとする必要がある。
- (3)ある歴史的な時期におけるあらゆる事実や出来事は、意味解釈という観点から説明しうるものであり、またその意味は常に他の予測不能な無数の意味と関わりを持っている。ドラッカーの技術論は、そこにいかなる意味を見出すかという解釈と行動における能動性の観点から捉えうる。
- (4)そうした観点から、ひとたびある技術が社会に放たれたならば、社会的現実の様相がその意味や価値を複合的に決定することになる。それはその技術が社会に「責任を伴いつつ選ばれる」過程といってもよい。その態様とは還元主義的なアプローチでは把握不能なものであり、むしろ形態として知覚されるものとするのがドラッカーの立場である。

そのような技術の理解方法は、因果論的な見解を完全に排除するものではないが、必ずしも理解への歩調をともにするものでもない。社会的対話装置から紡ぎ出される点において、そのようなアプローチが単にマネジメントの理解の手段としてだけでなく、ドラッカー的思考ともいいうる思想的位置づけを基礎づける上でも見逃しえない視点をなすことは確かである。

結語——銀河を越えて

ドラッカーの著作に通底する一連の視座が、近代合理主義なるものへの懐疑、あるいはその限界への認識に発しているのはまぎれもない事実である。そして、彼が主張するポストモダンなるものは、精神的立場や思考様式が、その背後にある歴史的・社会的に決定された存在につなぎ止められた状態を問うとともに、そこから一步進んで世界に本来内在する自律性と主体的個との有機的相関にもとづく関係性の再構築に結びつくものであった。

彼がその主張の中で、デカルトやルソー、マルクスなどを名指して、社会的存在と理念との間の利害関係の結合、そしてそこから当然に導出される必然の進歩なる概念を野蛮で暴力的なシステムと断定するのは、そこに見られる合理からの束縛を一義的に主張する立場から脱却して、新しい社会的認識を切り開こうとする野心を示していた。彼にとって、組織のマネジメントをはじめとする方法の探索において、変転きわまりなき社会との関係で、それは途方もない多様性の追求と同義であった。価値観や認識、信条を単純に特定の理念に従属させるきわめて粗っぽい方法は我慢のならないものだった。

その問題意識を明確化させるにあたり、組織のマネジメントとともにもう一つ立ち現れる重要なコンセプトが技術、知識であった。再び彼自身の言葉を引くと、彼は1455年のグーテンベルクの印刷術の発明よりも、その後60年を経て社会に立ち現れた低価格かつ大量頒布の印刷本の普及に实际的な意味を見出している。そのような視角は彼の技術観を象徴するとともに、当該技術の持つ人間的・社会的影響に焦点を合わせたことを示している。彼は技術の本質を技術以外の自律的で多様な人間社会の能動的な解釈と行動、責任に見出したのだった。

こうしてドラッカーは、その時々に変転の圧力に晒される世界を捉えるために、いかなる技術がいかなるメディアを通して、いかなる社会形態が形成されるかを問うことになる。そこにおいてこそ世界と世界観のブリッジを担う概念が、モダン、ひいてはポストモダンといった文明史的視野を提供した。技術は新文明の対話装置であり、新社会の酵母であった。

他方でテイラー主義を高く評価したことからも知られるように、産業社会との関係では、ドラッカーの技術観は合理による体系を補完しているように見える。しかし、彼の技術に関する叙述をさらに深く読んでいくと、ポストモダンという歴史的視点の導入にも見られるように、決して大組織との結びつきによる生産性のみを意味するものではないし、また産業社会に一義的ないし因果的に関係づけられるものではないことがわかる。

むしろ、ドラッカーの技術に関する一連の見解は、より広い文脈に発する彼の世界観たる正統保守主義におけるアプローチの重要な支流をなすものと考えてよいであろう。しばしば指摘されるように、初期の3部作(『「経済人」の終わり』『産業人の未来』『企業とは何か』)で、すでに方法論や理論展開はほぼ確立されている。かかるアプローチとはその背後にある世界観の基礎的性向の表れであり、その創造者こそがメディアとしての技術であった。

いずれにせよ、そうしたドラッカーの時代認識や世界観、基礎的方法論をたどっていく限り、技術をめぐる議論が単に組織のマネジメントを補完するものというよりは、むしろそれ以上の深い奥行きを持って彼の基礎的視座に迫るものであることがわかる。それを明らかにするための一つがメディア論的次元からの接近であった。

「今日の電子時代にあってはデカルトは粗略にあつかわれはじめている」——⁽²²⁾ マクルーハンはこんな暗示的言辞を吐いている。印刷による活字メディアがデジタル化するとき、それは形態としてのメディアとともに、人間の脳に差し込まれたもう一つの眼が根源的な変化を余儀なくされることを意味する。脱近代が現実化しつつあるなかで、次なる世界がどのような相貌をとるのかはまだ見えていないものの、ドラッカーならそれが自由な知識社会になるかそうでないものとなるかは現に21世紀を生きる君たち次第だと言ったに違いない。

【注】

- (1) 彼の観察対象については1934～1946年「政治」(『経済人の終わり』『産業人の未来』『企業とは何か』)、1947～1968年「マネジメント」(『現代の経営』『創造する経営者』『経営者の条件』等)、1969～1989年「歴史」(『断絶の時代』『新しい現実』等)、1990～2005年「新社会」(『非営利組織の経営』『ポスト資本主義社会』『ネクスト・ソサエティ』等)とごくおおざっぱに整理できる。以後この認識にもとづき議論を進める。
- (2) Drucker [2005]。
- (3) Drucker [1989; 1989], p. 261; pp. 378-379。
- (4) マクルーハンとドラッカーの交流は1940年代からの長きにわたるものだった。おそらく二人の間にはメディア、技術をめぐる人間社会の形成のありようについて、少なからぬ議論が交わされたはずである。自らの問題関心との明確な通底を意識するがゆえに、ドラッカーはマクルーハンを「テクノロジーの予言者」と称揚するにはばからなかったし、他方でマクルーハンは著『グーテンベルクの銀河系』の序において主要な問題提起者としてドラッカーの名を特記している。そしてその意味するところは、マクルーハンがドラッカーが潜在的に考えていたことを明確な言語で表現しえたことが大きいものと思われる。
- (5) Drucker [1978; 2008], p. 245; p. 285。
- (6) 篠原・井坂[2007]。
- (7) 篠原・井坂[2007]。
- (8) Drucker [1939; 2007], p. 219; p. 203。
- (9) Drucker [1989; 1989], p. 263; p. 381。
- (10) Drucker [1989; 1989], p. 263; p. 382。
- (11) 篠原・井坂[2007]。
- (12) McLuhan [1964; 1987], 邦訳pp. 270-274。
- (13) Drucker [1968; 2007], p. 80; p. 66-67。
- (14) Drucker [1978; 2008], p. 245; p. 285。
- (15) McLuhan [1962; 1986], 邦訳pp. 5-6。
- (16) もっともそうはいつでもドラッカーはマクルーハンから具体的などのような概念の明確化にあたっての影響を受けたのかについて、必ずしも詳しく論及しているわけではない。しかし、個と社会環境を包摂する対話的な思考枠組みの設定と社会科学との接触に、彼の言う脱近代における一つの重要な鍵を見ていこうとする立場はあながち見当はずれのものとは言えないように思う。そう考えるならば、ドラッカーの業績を脱モダンの方法論で文明社会における基礎を打ち立てる首尾一貫した試みとするのは注目してよいと思われる(Drucker [2005])。
- (17) Drucker [1968; 2007], p. 269; p. 276。
- (18) Drucker [1993; 2007], p. 214; p. 270。
- (19) McLuhan [1962; 1986], 訳者解説p. 478。
- (20) Drucker [1993; 2007], p. 216; p. 274。
- (21) その一つの表れとして、彼の経営学の集大成ともいべき大著『マネジメント』(1974年)において、「コミュニケーションに関し次のように述べられる「コミュニケーションとは受け手の行為である」に凝縮されるのは、事象の持つ意味や価値とは、発し手ではなく受け手の能動性に存するというものの見方である。
- (22) McLuhan [1962; 1986], 邦訳p. 373。

【参考文献】

[一次文献]

Drucker, P. F. [1933] *Friedrich Stahl: Konservative Staatslehre und Geschichtliche Entwicklung*, Mohr (Translated by Richard Brem, *Friedrich Julius Stahl: Conservative Theory of the State and Historical Development*).

——[1939] *The End of Economic Man*, John Day (上田惇生訳[2007]『「経済人」の終わり』ダイヤモンド社).

——[1942] *Future of Industrial Man*, John Day (上田惇生訳[2008]『産業人の未来』ダイヤモンド社).

——[1946] *Concept of the Corporation*, John Day (上田惇生訳[2008]『企業とは何か』ダイヤモンド社).

——[1954] *The Practice of Management*, HarperCollins (上田惇生訳[2006]『現代の経営』(上・下)ダイヤモンド社).

——[1958] *Technology, Management and Society*, HarperCollins.

——[1957] *Landmarks of Tomorrow*, HarperCollins.

——[1969] *The Age of Discontinuity*, HarperCollins (上田惇生訳[2007]『断絶の時代』ダイヤモンド社).

——[1978] *Adventures of a Bystander*, HarperCollins ([2008]上田惇生訳『傍観者の時代』ダイヤモンド社).

——[1989] *The New Realities*, HarperCollins (上田惇生訳[1989]『新しい現実』ダイヤモンド社).

——[1993] *Post-Capitalist Society*, HarperCollins (上田惇生訳[2007]『ポスト資本主義社会』ダイヤモンド社).

——[2003] *A Functioning Society*, Transaction.

——[2005]「P. F. ドラッカー博士インタビュー録」(5月7日)(『週刊東洋経済』2005年7月2日号).

McLuhan, M. [1962] *The Gutenberg Galaxy: The Making of Typographic Man*, University of Toronto Press (森常治訳[1986]『グーテンベルクの銀河系』みすず書房).

——[1964] *Understanding Media: The Extensions of Man*, McGraw-Hill (栗原裕・河本仲聖訳[1987]『メディア論』みすず書房).

[二次文献]

Amin, Ash ed. [1994] *Post-Fordism*, Blackwell.

Brynjolfsson, Erick and Brian Kahin [2000] *Understanding the Digital Economy: Data, Tools, and Research*, The MIT Press.

Burke, P. [2000] *A Social History of Knowledge*, Polity Press (井山弘幸・城戸淳訳[2004]『知識の社会史』新曜社).

Febvre, L. P. V., H. J. M. [1958] *L'apparition du livre*, Albin Michel (関根素子・長谷川輝夫・宮下志朗・月村辰雄訳[1998]『書物の出現』(上・下)ちくま学芸文庫).

Flaherty, J. E. [1999] *Peter Drucker : Shaping the Managerial Mind*, Jossey-Bass.

Luhmann, N. [1992] *Beobachtungen Der Moderne*, Westdeutscher Verlag GmbH (馬場靖雄訳[2003]『近代の観察』法政大学出版局).

Manheim, K. [1927] *Das Konservative Denken: Soziologische Beiträge zum Werden des Politisch-Historischen Denken in Deutschland* (森博訳[1997]『保守主義的思考』ちくま学芸文庫).

Parsons, T., *Sociology of Knowledge and the History of Ideas* (油井清光監訳[2003]『知識社会学と思想史』学文社).

Wood, J., M. Wood eds. [2005] *Peter F. Drucker: Critical Evaluations in Business and Management*, Routledge.

秋元律郎[1999]『知識社会学と現代——K・マンハイム研究』早稲田大学出版部.

——[2006]「P. F. ドラッカー『産業人の未来』における文明と社会——「シュタル論」正統性概念との関連から」『文明』(東海大学文明研究所)第8号.

——[2007a]「P.F. ドラッカー思想の基本構造——時代診断における反構成主義的特質」『文明』(東海大学文明研究所) No. 9.

——[2007b]「P. F. ドラッカーの保守主義思想——E. パークの遺産と産業社会の構想」『東京大学大学院情報学環紀要』(東京大学情報学環) No. 72.

『現代思想』[1992] (「メディアとしての人間」) Vol. 20-3.

篠原勲・井坂康志[2005]「ドラッカー社会哲学における自由概念の位置付け」『鳥取環境大学紀要』第3号.

——・——[2006]「『マネジメント以前』におけるドラッカーの思考様式に関する試論」『鳥取環境大学紀要』第4号.

——・——[2007]「P.F. ドラッカーにおける知識の概念」『鳥取環境大学紀要』第5号.

須藤修・出口弘編著[2003]『デジタル社会の編成原理』NTT出版.

花田達朗[1996]『公共圏という名の社会空間』木鐸社.

——[1999]『メディアと公共圏のポリティクス』東京大学出版会.

水島久光[2004]『閉じつつ開かれる世界』勁草書房.

箕輪成男[1996]「文明としての印刷技術と文化としての出版環境」『出版研究』26号.

村上泰亮[1992]『反古典の政治経済学』(上・下)中央公論新社.

【略歴】1972年埼玉県生まれ。早稲田大学政治経済学部卒業。東京大学大学院人文社会科学系研究科社会情報学専攻博士課程単位取得。現在、東洋経済新報社編集者、東海大学情報教育センター・ものづくり大学製造技能工芸学科非常勤講師、石橋湛山新人賞(石橋湛山記念財団)審査員。